



TITLE:

吉田松陰とその同志

AUTHOR(S):

CITATION:

吉田松陰とその同志. 1994

ISSUE DATE:

1994-10

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/148392>

RIGHT:

吉田松陰とその同志

会 期／平成6年9月26日(月)～10月28日(金)

●日曜・祝日は除く●

10時～17時(入場は16時30分まで)

会 場／附属図書館展示室(3階)



京都大学附属図書館

はじめに

本学図書館の所蔵する維新特別資料文庫は、明治二〇（一八八七）年三月品川彌二郎（一八四三—一九〇〇）によって京都の高倉通錦小路に創設された「尊攘堂」（私設の教育啓蒙施設）に収集された資料群である。

尊攘堂の由来を辿れば幕末にある。教育者・啓蒙家として名高い吉田松陰（一八三〇—一八六〇）は、京都に尊攘堂を建てて、勤皇の志士を祀り、国民の志気を鼓舞したいと考えていた。しかし、安政の大獄に刑死し、江戸（東京）の獄中で入江子遠（九一）に後事（尊攘堂建設）を託したものの、子遠もまた禁門の変において敗死した。松陰の弟子であった品川彌二郎は、明治に入って、後事を託したこの子遠宛ての書簡に出会い、先師の悲願を実現しようと奔走し、尊攘堂を創設したのである。彌二郎は、尊攘堂に幕末維新の殉難志士の英霊を祀り、彼等の事蹟を示す資料・遺墨・遺品を極力蒐集し、堂内に収納し、丁寧に保管した。同時に、毎年志士の慰霊祭を営み、その際には遺墨・遺品を展示して公開した。

彌二郎の死後、尊攘堂保存委員会であった松本鼎等は彌二郎の子息彌一等とともに、京都帝国大学の構内に尊攘堂を新築し、所蔵品をすべて同大学に寄贈することを決議した。明治三三（一九〇〇）年一〇月、文部大臣にこれを要請し、許可されたのが翌三四年二月のことであった。松陰が京都に尊攘堂を創設しようとした意図には、京都の地に大学校を設立し、天下の俊英を集め、国家有用の人材を育成することが含まれていた。前記子遠宛ての書簡に、このことが明瞭に述べられている。京都における大学の創設は、明治三〇（一八九七）年六月の京都帝国大学の開設によって実現した。そこに両者を結ぶ由縁があった。同三六年四月、構内に尊攘堂が新築され、松陰の悲願、彌二郎の年来の宿願は達成された。その建物は、現在も図書館の西北に存在している。

尊攘堂のコレクションには、書籍を主に、掛軸・巻物・屏風・額・遺品（刀、烏帽子、陣笠、軍扇等）・写真・拓本等が含まれている。先述した設立・蒐集の経緯から、松陰の書簡・上書・稿本等の遺墨、およびそれらの類縁資料が、このコレクションの中核となっているが、松下村塾（松陰が山口県萩に設立した私塾）に集まった高杉晋作（一八三九—一八六七）、久坂玄瑞（一八四〇—一八六四）、木戸孝允（一八三三—一八七七）、山県有朋（一八三八—一九二二）等長州（現在の山口県あたり）出身の志士の墨跡・遺品も豊富である。さらに、長州だけでなく日本全土の志士にも及び、しかも、階層からみれば皇族・藩主から徴録の士まで身分の如何を問わず、及ぶ限りの文献・資料が集められている。

一方、明治三三（一九〇〇）年の寄贈にあたって、尊攘堂保存委員会は、一〇月二七日の松陰忌と、二月二六日の品川忌には、尊攘堂を借用して慰霊祭を営むこと、および所蔵品を展覧して公衆の閲覧に供することを京都帝国大学に申請し、受け入れられている。当時の木下廣次総長は、寄贈品を特別に保管するよう、島文次郎図書館長に命じた。島館長は、これらを貴重書庫に保管し、必要に応じて堂内に陳列することとした。以後二〇数年、協定どおり年二回の祭典は催されていたが、大正一〇（一九二〇）年になって、年一回秋の小祭と三年に一回の大祭に変更され、昭和一九（一九四四）年に貴重資料の疎開という事態が生じるまで、展示会は開催され、例祭は翌二〇（一九四五）年が最後となった。

京都では建都二二〇〇年が記念されている最中であって、本館におけるこのテーマでの展示会の開催は九度目（戦後は六度目）の試みになる。幕末から明治にかけて、大志を抱いて奔走した志士たちの思想・学術・行動を窺い知ることができ、明治維新史を解明するのに有用な資料群を展示することによって、日本の近代化の礎石となった志士たちの足跡を、吉田松陰を中心とした人物の流れの中で捉えるとともに、やがて一〇〇歳を迎える京都大学の創立に連なる歴史の一齣をふりかえってみることも、意義あることと思われる。

今回の展示に際しては、人文科学研究所の佐々木克教授のご指導・ご助言をいただいた。また、図書館・情報の分野でコンピューター・ネットワーク化が推進されようとしていた現状において、初めての試みとして電子図書館版の展示会の企画があり、これについては、工学部の長尾真教授のご指導・ご助言をいただいている。この場を借りてお礼を申し上げておきたい。展示会をコンピューター画面のいわば仮想世界で眺めることが、どのような文化感覚をもたらすか。この新しい試みについて、観覧された方々のご意見をうかがいたいものである。

最後に、日常業務を果たすかたわら、この企画に精力を傾け当たってくれた京都大学附属図書館の職員諸氏の苦勞をねぎらっておきたい。

一九九四年九月二六日

附属図書館長 朝尾直弘

凡例

- 一、番号は展示番号である。
- 一、展示目録の記述はタイトル、著者等、書年、数量（出品物を含む資料の物理単位）、大きさ（軸物等においては本紙部分の縦×横、冊子、折本については縦のみ、扇面については料紙高さ×外周）、装訂等、当図書館における請求記号である。なお、「」中の記述は資料中表示はないが推定できる事項である。
- 一、展示目録の解説は本学人文科学研究所・佐々木克教授、書誌調査、釈文等作製は図書館職員が担当した。

展示目録

番号 一
舊尊攘堂圖

「神坂」雪佳画 羽田享題詞
一幅 八三×六一糎 軸物（紙本裂装） 淡彩画

請求記号 尊追加一二貴

番号 二

吉田松陰 画像

松浦松洞画 吉田松陰賛

「安政六年五月廿一日」

一幅 一二四×三二糎 軸物（紙本裂装）
請求記号 尊軸一四九貴

番号 三

吉田松陰 松柳詩

吉田松陰自筆

一幅 一八×二五糎 軸物（紙本紙装） 墨書
請求記号 尊軸四五貴

番号 四

吉田松陰 書狀（品川彌二郎宛）

吉田松陰自筆

安政五

一幅 二九×三二・五糎（三紙張り合わせ） 軸物（紙本罫紙裂装） 墨書
請求記号 尊軸六五貴

番号 五

吉田松陰 書狀（某宛）

吉田松陰自筆

「安政六」

一幅 二五×三四糎 軸物（紙本紙装） 墨書・朱筆
請求記号 尊軸四九貴

番号 六

書狀張り合わせ

安政六

一幅 一二二×三四糎 軸物（紙本紙装） 墨書

吉田松陰自筆（品川彌二郎宛「但死生」）

玄瑞自筆「今日の事」

その他三通

請求記号 尊軸一四五貴

番号 七

吉田松陰 書狀（堀江克之助宛）

吉田松陰自筆

安政六

一幅 一一・八×三四糎 軸物（紙本裂装） 墨書

「水火和合ノ論云々」

安政六年十月江戸傳馬町獄中にて

請求記号 尊軸一一八貴

番号 八

吉田松陰 作詩圖解

吉田松陰自筆

一幅 二四×三五糎 軸物（紙本紙装） 墨書
請求記号 尊軸四八貴

番号 九

村田清風 七絶

村田清風自筆

一幅 一三三×三〇糎 軸物（紙本裂装） 墨書
請求記号 尊軸一三一貴

番号 一〇

岡本梅林圖並題詩

縣小坡画 周布政之助詩文

一幅 一六×四六糎（二紙張り合わせ） 軸物（紙本紙装）
請求記号 尊軸七四貴

番号 一一

久坂玄瑞 七絶

久坂玄瑞（江月齋）自筆

〔万延二〕

一幅 一〇九×三〇糎 軸物（紙本裂装） 墨書
請求記号 尊軸一四〇貴

番号 一二

高杉晉作 七絶

高杉晉作自筆

〔万延二〕

一幅 一〇〇×二八糎 軸物（紙本裂装） 墨書
請求記号 尊軸二貴

番号 一三

木戸孝允 詩

木戸孝允（松菊）自筆

明治二

一幅 一三三×三一糎 軸物（紙本裂装） 墨書
請求記号 尊軸一四七貴

番号 一四

伊藤博文 七絶

伊藤博文自筆

明治一二

一幅 一二九×六四糎 軸物（紙本裂装） 墨書
請求記号 尊軸一二二貴

番号 一五

山縣有朋 今様

山縣有朋自筆

慶応三

一幅 一二九×五八糎 軸物（紙本紙装） 墨書
請求記号 尊軸一二六貴

番号 一六

佐久間象山 山水圖

佐久間象山自画賛

〔嘉永六〕

一幅 六六×二六糎 軸物（紙本裂装） 墨画
請求記号 尊軸一五五貴

番号 一七

松陰先生遺訓〔二〕

吉田松陰〔述〕 品川彌二郎注釈並筆

明治三〇

一幅 一二二×五八糎 軸物（紙本裂装） 墨書
軸一九四と双幅
請求記号 尊軸一九五貴

番号 一八

吉田松陰 復来原良藏書

吉田松陰自筆

〔嘉永〕

一卷 二六（二四×三四）糎 卷子 墨書

(吉田松陰書翰卷一の内)
請求記号 尊卷二八六貴

番号 一九

吉田松陰 送中村百合三序

吉田松陰自筆

〔嘉永〕

(吉田松陰書翰卷二の内 第三書) 二六(二四×二四〇) 糹 卷子 墨書
請求記号 尊卷二八六貴

番号 二〇

吉田松陰 擬對策評

土屋蕭海自筆 吉田松陰評(自筆)

嘉永六

一卷 二九(二七×三〇九) 糹 卷子 本文墨書 評朱書
請求記号 尊卷二八七貴

番号 二一

吉田松陰 上書草稿

吉田松陰自筆

〔安政六〕

一卷 三七(二三×一一四) 糹 卷子 墨書
請求記号 尊卷三〇一貴

番号 二二

吉田松陰 史論草稿

吉田松陰自筆

一卷 二八(二三×一二二) 糹 卷子 墨書
請求記号 尊卷二八一貴

番号 二三

吉田松陰 孫子正文

吉田松陰筆

一帖 二二糹 折本 料紙雲母引 半折四行 字数不等 藍界
請求記号 尊ソ一八貴

番号 二四

吉田松陰 李氏焚書抄 四卷

吉田松陰自筆本

二冊 二四糹 和装 袋綴

「高杉藏書」の朱印記あり
請求記号 尊リ四貴

番号 二五

吉田松陰 愚論 他

吉田松陰自筆

一冊 二五糹 和装 袋綴
請求記号 尊ク四貴

番号 二六

高島秋帆 富士圖

高島秋帆画并賛 大槻警溪賛

安政五

一幅 五七×八一糹 軸物(紙本裂装) 墨書
請求記号 尊軸一九三貴

番号 二七

藤本鐵石 書狀(忠兵衛宛)

藤本鐵石(老鐵寒土)自筆

一幅 二四×三四糹 軸物(紙本裂装) 墨書・絵入
請求記号 尊軸一五三貴

番号 二八

梅田雲濱 和歌

梅田雲濱(定明)自筆

一幅 二〇×二九糹 軸物(紙本裂装) 墨書
請求記号 尊軸一五七貴

番号 二九

佐久間象山 書狀(山寺懺堂, 三村榮眞宛)

佐久間象山自筆

一卷 二四(二〇×二二) 糶 卷子 墨書

四月二十七日付書狀

箱裏書「松陰先生入海始末此書ニテ眞実を表出せり至々寶々やし拝書」

請求記号 尊卷二九八貴

番号 三〇

會澤恒藏 書狀 (川瀬七郎右衛門宛)

會澤恒藏自筆

一卷 卷子(三二等と同装)

五月二十九日付書狀

請求記号 尊卷二九五貴

番号 三一

藤田東湖 書狀 (川瀬七郎右衛門宛)

藤田東湖自筆

一卷 卷子(三〇等と同装)

一二月四日付書狀

請求記号 尊卷二九五貴

番号 三二

來島又兵衛 書狀 (喜多村藤馬宛)

來島又兵衛自筆

一卷 一七×二九二 糶 卷子 墨書

請求記号 尊追加四貴

番号 三三

船越清藏 七絶

船越清藏自筆

一幅 一五×一七 糶 軸物(紙本紙装)

請求記号 尊軸三貴 墨書

番号 三四

久坂玄瑞 天王山軍中日記

久坂玄瑞(実甫、義助)自筆

「元治二」

一卷 一四(二二×九七) 糶 卷子 墨書

付・日柳燕石跋文并七絶(慶応四)

請求記号 尊卷二九二貴

番号 三五

久坂玄瑞 書狀 (前原一誠(佐世八十)，入江九一宛)

久坂玄瑞(義助)自筆 楯取素彦朱注

「万延二」

一卷 二三(二三×一三七) 糶 卷子 墨書

五月十九日付

請求記号 尊卷三〇七貴

番号 三六

時山直八 書狀

時山直八自筆

「慶応二」

一卷 一七(一六×二七三) 糶 卷子(三七と同装) 墨書

請求記号 尊卷三〇九貴

番号 三七

入江九一 書狀 (杉山松助(介)宛)

入江九一等自筆

一卷 一七(一六×二七三) 糶 卷子(三六と同装) 墨書

「文久二」八月十四日付

請求記号 尊卷三〇九貴

番号 三八

高杉晉作 扇面

高杉晉作(東行)自筆

一幅 扇面一五×八一 糶 軸物(紙本裂装) 墨書

(武市瑞山(茗礪)筆墨画と同装)

請求記号 尊軸一八四貴

番号 三九

高杉晉作 七絶

高杉晉作自筆

一幅 三三×二六糎 三三×二四糎 軸物(紙本紙装) 墨書
請求記号 尊軸一五二貴

番号 四〇

野村望東女 和歌

(英傑遺墨の内)

清川八郎等筆
一帖 四〇糎 折本 墨書
請求記号 尊エ五貴

番号 四一

松浦八郎 和歌

(英傑遺墨の内)

清川八郎等筆
一帖 四〇糎 折本 墨書
請求記号 尊エ五貴

番号 四二

真木和泉 和歌

(英傑遺墨の内)

清川八郎等筆
一帖 四〇糎 折本 墨書
請求記号 尊エ五貴

番号 四三

忍向(月照) 和歌

(英傑遺墨の内)

清川八郎等筆
一帖 四〇糎 折本 墨書
請求記号 尊エ五貴

番号 四四

木戸孝允筆 議定盟約

木戸孝允自筆

慶応丁卯(三)年六月付
一卷 一九(一七・五×三〇〇)糎 卷子 墨書
卷首に杉孫七郎の添状(品川彌二郎宛)あり
請求記号 尊卷三〇六貴

番号 四五

大久保利通 薩長藝三藩盟約

大久保利通筆

[慶応三]
一幅 一六×三三糎 軸物(紙本裂装) 墨書
請求記号 尊軸六四貴

番号 四六

松下邨塾二燈錢申合帳

文久一

一卷 一四(一四×三二〇)糎 卷子 墨書
請求記号 尊卷二八五貴

解説

番号 一

舊尊攘堂圖

明治二〇年（一八八七）品川彌二郎が、京都高倉通錦小路に別荘を設けて、尊攘堂と名付け、維新の志士の遺墨を収集・展示し、かつ毎年、維新の運動に活躍した志士達を偲んで祭典を営んだ。京都に「尊攘堂」を設けるといふのは、吉田松陰の遺志でもあった。この図は、品川彌二郎の恩顧をうけ、一時堂内に寄寓していた神坂雪佳が昭和一二年に創立五〇周年を記念して描いたもの。なお尊攘堂の史資料は、明治三四年に京都大学に移管された。

番号 二

吉田松陰 画像

安政の大獄が進行する中、萩の野山獄に入れられていた吉田松陰も、安政六年（一八五九）五月に江戸へ護送されることとなった。そこで吉田松陰の門下生達は、同じ門下の画家松浦松洞に師の肖像を描かせ、松陰の自賛をもとめた。二十一回猛士は吉田松陰の号、日付の五月二一（念一）日は、江戸護送の五日前である。

三分出塵兮諸葛已矣夫 一身入洛兮賈彪安在哉
心師貫高兮而無素立名 志仰魯連兮遂乏釋難才
讀書無功兮機學三十年 滅賊失計兮猛氣廿一回
人譏狂頑兮鄉黨衆不容 身許君國兮死生吾久齊
至誠不動兮自古未之有 古人難及兮聖賢敢追陪

思父年少能知敬我、我是以深愛思父、思父無爲而死、是思父爲辜我、我害義而生是我爲自思父、思父室懸我像、兩心相照、一幅感深、辜負二字、天地豈容之哉。歲之五月念一 二十一回猛士書

番号 三

吉田松陰 松柳詩

安政三年（一八五六）二月三日の作。吉田松陰の最も親しい友人の一人である、来原良藏に贈ったもの。良藏が藩の密用方祐筆に任せられたことにたいし、いま暫くは仕官の念を断ち、諸国を遊歴して天下の情勢を学ぶことが大事ではないかと忠告した。

告したものの。来原良藏（文政二二年生）は長州藩士で、伊藤博文の師でもある。

番号 四

吉田松陰 書狀（品川彌二郎宛）

日孜字思父説 名字をつけてほしいと頼んだ品川彌二郎の求めに応じて、安政五年（一八五八）二月一九日、名は日孜、字は思父とすべし、としたもので、その典故と意味を説明したもの。孜は勤勉の意（上段）。

書狀 同年二月二〇日、日孜思父説を補い、読書の大事であることを説いたもの。品川彌二郎（天保一四年生）は長州藩士、一五歳で吉田松陰の門に入る（中段）。（下段左）は、「重夢北山君安世」（己未文稿）。北山安世は佐久間象山の甥で松代藩士。嘉永六年（一八五三）の吉田松陰の江戸遊学に交遊が結ばれた。

日孜字思父説

先是彌治從余学、問余以名字、余曰、日孜思父爲可、而未有其説也、彌治年甫成童、乃来見余、其容色温直敦朴、余一見異之、已年餘、無有卓々可稱者、而其中汪然自與人不同矣、余益愛之、然余猶謂彌治以人物勝、而學問不稱、故及其問名字也、以是應之矣、夫予思日孜者、大禹之言也、思者知也、孜者行也、知而行、行而知、日之者非一日也、學欲師聖人者、其得不三致思焉哉、晉陶士行有言、大禹聖人乃惜寸陰、其亦謂此也歟、今茲臘月五日余蒙下獄之命、彌治與同學七人詣政府請罪名、遂坐囚于家、囚居無事、蓋進於学矣、今因走此説誘之曰、彌治治々、當今天下之事、有眼者皆見而知之、吾黨爲任甚重、立志宣大、不可區々而自足、假令大禹不可企、其亦爲陶士行乎、嗚呼、其所本者字而已、勉哉日孜、念哉思父、是爲説、安政戊午十二月仲九、松陰藤寅撰

書狀

彌治足下、幽囚何状、家嚴疫疾未平、僕是以未能赴獄、僕看護鬱陶、時復觀書、古人面目、千歲如新、不似今世人之朝雲暮雨、所囑名字説、偷問僅成三百言、而無咎至、且讀且談、頗覺適意、說中所引大禹陶士行、今世人必以爲大言夸語也、但学人之志、要貴于不自画焉耳、足下幸悟此意、昨讀漢宣紀、孝武廟樂事、夏侯長公議詔書不可用也、且曰、議已出口、雖死不悔、長公坐是下獄、夫長公之下獄、以非詔書毀先帝也、今吾黨奉 天勅戴公旨、徒觸姦權之鋒、以至于此、不逮長公遠矣、足下以爲何如、五七日後、家嚴疾平、僕乃赴獄、而足下諸人幽囚、亦從釈放耳、當相誓讀書、益求及古人也、無咎將往訪、書所不盡、萬在口述、不一、廿日寅白

彌治 足下

番号 五

書状張り合わせ

吉田松陰 書状(某宛)

安政六年(一八五九)四月末のものと推定される、宛先不明書簡。吉田松陰が野山獄中において読書に専念していた時のもので、獄中に漢籍の周旋を依頼したもの。「此二冊」とは、明の儒者李卓吾の「焚書」と「続蔵書」のことで、野村和作の勉強のため、回付してほしいと述べている。

此二冊如例和作へ遣スベシ。(朱書後筆)

李氏二冊返璧、瀧へ宣敷御謝言被下度候。

此書可宝、缺葉等往々補綴アリ、先輩ノ續密又想フベシ。然ルニ少々蟲食相見候。後嗣ノ怠なり。能々愛護襲蔵セヨト鴻生へ御傳へ之事。・・・以下略

番号 六

吉田松陰 書状(品川彌二郎宛)

安政六年(一八五九)四月頃、品川彌二郎宛。生死について論じ、真の正義をなして死ぬるの意味を、理解する者が少ないことを嘆いたもの(上段)。

(前文欠)

但死生ノ悟が開ケヌト云ハ餘リ至愚故、詳ニ云ハン。十七ハノ死が惜シケレバ、三十ノ死も惜シ。八九十百ニなりても是で足タト云フコトナシ。草蟲水蟲ノ如ク半年ノ命ノモノモアリ、是以テ短トセズ。松柏ノ如ク數百年ノ命ノ者アリ、是以テ長トセズ。天地ノ悠久ニ比セハ松柏も一時蠅なり。・・・以下略

番号 七

吉田松陰 書状(堀江克之助宛)

安政六年(一八五九)一〇月一日、堀江克之助宛。堀江は水戸藩の郷土で、ハリス要撃を企て、江戸伝馬町の獄に投ぜられ、松陰と同獄となり、獄中で特に親交をむすんだ。

水火和合ノ論感服仕候。小生兼而同志と相勵ミ候一編申上候。天照ノ神勅ニ、日嗣之隆興、天壤無窮と有之候所、神勅ノ相違なけれハ、日本ハ未タ亡ヒズ、日本未タ亡ビサレハ、正氣重テ發生ノ時ハ必ある也。只今ノ時勢ニ頓着スルハ、神勅ヲ疑ノ罪輕からざる也。

皇神ノ誓おきたる國なれハ

正しき道のいかて絶へき

道守る人も時には埋もれとも

みちしたゑねハあらわれもせめ

矩方

・・・以下略

番号 八

吉田松陰 作詩圖解

品川彌二郎は、安政四年(一八五七)一五歳で松陰の門下に入ったが、その時松陰が、起承転結などの作詞法を図解して教え、品川にあたえたもの。

番号 九

村田清風 七絶

村田清風 天明三(一七八三)→安政二(一八五五) 長州藩天保改革の指導者。吉田松陰は青年時代に清風に会って、その人物に敬服し、清風もまた松陰に囑望した。

鐵心報國堅於城 勿咲文臣視甲兵 永祿遺謀豈可廢 漁陽鼓雜霓裳聲

番号 一〇

岡本梅林圖並題詩

縣小坡画 周布政之助詩文

周布政之助(別名、麻田公輔) 文政六(一八二三)→元治一(一八六四) 村田清風のあとをうけ、長州藩の改革を推進した。安政五年、長州藩は摂海警備を幕府に命ぜられ、兵庫の西宮一帯の海岸の警備に当たった。岡本梅林(現、神戸市東灘区)は、打出浜の近くにあり、周布も訪れている。周布の題詩及び跋は、文久二年(一八六二)二月一日のもの。

攝南處々置兵屯 中有梅花十里邨
沿海幸無夷警急 好將文酒訪芳魂
一枝嶺上掃千軍 壯士遺芳長絶群
若有胡騎向畿甸 梅花誰與建奇勲
壬戌二月朔、小坡縣翁袖梅林圖一卷、示我曰、是我所作岡本梅林、將以贈又邨

縣子獲題一絶兼寄縣子、縣子在攝州打出成營、打出・岡本・生田地皆相近、今披此圖遊此林、誰不懷古人箭室插花、翁以此圖爲贈、豈止風流文雅、蓋亦有微意、獲詩以表其意、縣子以爲如何

麻田生獲拜具

番号 一一

久坂玄瑞 七絶

久坂玄瑞 天保一一(一八四〇)〜元治一(一八六四)長州藩士で、松陰の妹を妻とす。松陰に「潔烈の操」ありといわれ、長州藩尊攘撃派のリーダーとなる。万延一年、藩庁から英学修行のため江戸遊学を命ぜられる。この詩はこの年、江戸桜田の長州藩邸で書いたもの。江戸斎は久坂の号。

師友殉難強半亡 悲哀無所訴蒼旻

前年爲客聞鶻語 不似今宵轉斷腸

江月齋

番号 一二

高杉晉作 七絶

高杉晉作 天保一〇(一八四一)〜慶応三(一八六七)「識見氣魄他人及ぶなく、高等の人物なり」と吉田松陰に評された、久坂玄瑞と松下村塾の双璧と呼ばれる。奇兵隊を結成し、討幕運動の先頭にたった。この詩は吉田松陰没後一年の万延一年の作で、師を弔う内容のもの。のち文久三年(一八六三)久坂玄瑞、品川彌二郎とともに、松陰の遺骨を世田谷若林(現、東京世田谷区若林の松陰神社)に改葬した。

掃墓東蜀淚潸然 頻愧我黨負遺篇

伏懷往事恰如夢 花落烏啼已一年

先師義死也、著留魂錄一篇、以贈我黨、我黨之士、雖一人未能行其言、因詩中及之先師二十一回猛士小祥日 門人楠樹高杉生泣血弔之

番号 一三

木戸孝允 詩

木戸孝允(桂小五郎) 天保四(一八三三)〜明治一〇(一八七七)長州藩士。西郷隆盛、大久保利通とともに維新の三傑と呼ばれる。嘉永二年(一八四九)一七歳で松陰の兵学の門下生となる。この詩は、明治二年(一八六九)箱根において、亡き友を思い、国家の前途を案じて詠じたものである。松菊は木戸孝允の号。

一穗寒燈照眼明 默坐沈思無限情
回首知己人不見 丈夫必竟豈計名
世難多年萬骨枯 禁城風物幾變更
歲如流水去不返 人似草木爭春榮
邦家前路不容易 三千有萬奈蒼生
山堂半夜夢難結 千岳萬峯風雨聲
己巳晚秋游于函嶺一夜思亡友 松菊狂生

番号 一四

伊藤博文 七絶

伊藤博文 天保一二(一八四一)〜明治四二(一九〇九)長州藩士。師の来原良藏の紹介で、安政四年に吉田松陰門下となる。初代の内閣総理大臣。この七絶は、明治一二年(一八七九)五月の揮毫になるもので、ちょうど一年前の五月に、大久保利通が暗殺されたのであった。「英雄去」とは、大久保利通のことを詠じたものではないだろうか。春畝は伊藤博文の号。

千載眞知何處求 英雄去後氣如秋

一痕春月萬行淚 潑遍蜻蜒六十州

明治十二歲次己卯仲夏

春畝山人博文

番号 一五

山縣有朋 今様

山縣有朋 天保九(一八三八)〜大正一一(一九二二)長州藩士。安政五年吉田松陰入門。元帥・元老として、伊藤博文と並ぶ軍人政治家。「壬戌の春」すなわち文久二年(一八六二)春、京都の中山忠能の別荘に招かれた際に詠んだ今様歌。品川彌二郎の外題によれば、慶応三年(一八六七)に、山縣が京都二本松の薩摩藩邸に潜伏中に、旧作を揮毫したものであるという。

壬戌の春中山殿の別荘にめされけるとき

いつかむかしのくにふりニ、かへしてこそは 皇の、
みやこの春の花をしも、かさしてあそふ日もあらめ

番号 一六

佐久間象山 山水圖

佐久間象山 文化八年（一八一二）〜元治元年（一八六四） 松代藩士。洋・兵学者で、嘉永三年（一八五〇）江戸に私塾を開き、府下第一の評判となった。吉田松陰は嘉永四年に入門。西洋の技術の発達を高く評価し、松陰に海外の文物に目を開く要を説いた。象山は多藝多才で多くの山水画を残した。この絵は嘉永六年秋の作。

白石清泉人夢頻情懷久負故山春才疎

無補當今事不若歸田

終此身

象山并題

番号 一七

松陰先生遺訓「二」

松陰「述」 品川彌二郎注釈並筆

明治三〇年（一八九七）に、品川彌二郎が、恩師吉田松陰の遺訓を写し認めたもの。松陰は少年彌二郎を「彌治（二）は人物を以て勝る」と評して、囑望しかつ鍛練を加えた。そうした松陰を品川は、終生深く敬慕して止まなかった。ここに展示したのは、双幅の遺訓の、その二である。

「無暴其氣と云は即ち無害と云と同じ。害すると云暴ふと云に二様あり。一ハ私欲を肆にし直道を以て志を持する事を忘る、時ハ自ら省みて愧る所あり。大に氣を暴ひ害する也。是所謂不耘苗者也。二ハ浩然の氣の至剛は為す所道義に合ふよりして自ら生ずる者なり。然とも道義に合ふと合はぬをも考へず、向見すに大と剛とをなさんとするとときハ一時は我慢血氣にて狂暴粗豪を以て剛も大もなすへけれども遂には愈自ら省みて愧る所あり。武田信玄の終身論語を読む事能はさる如き、是最も氣を暴ひ害するの大なる者なり。是所謂壞苗者也。塞乎天地之間と云ハ其效驗を云なり。浩氣然のは本是大地間に充塞する所にして、人の得て氣とする所なり。故に人能く私心を除く時ハ至大にして天地と同一体になる也。今吾一言一行の細よりして本諸身徴諸庶民考諸三王而不謬、建諸大地而不悖、質諸鬼神而無猛、百世以俟聖人而不惑、動而世為天下道行而世為天下法言而世為天下則と云如くなれば、天地古今に充塞すと云べし。浩然の氣ハ古來聖賢相傳て孟子に至り發明する所學者に於て最切実なる事、故に特に是を詳にす。

松陰二十一回猛士先生遺訓の一

明治三十年四月二十三夜感する事のありて敬みて写し 認 尊攘堂主人やじ

番号 一八

吉田松陰 復來原良藏書

來原良藏宛。嘉永五年（一八五二）六・七月頃。『吉田松陰全集』（大和書房版）には、「來原良三に復する書」として、第六卷詩文拾遺に収められている。文中に昨冬水戸で会沢正志斎と会い、会沢に「身皇國に生れて、皇國の皇國たる所以を知らざれば、何を以てか天地に立たん」といわれ、帰ってから「六國史」を取り出して読んだ、とある。松陰は來原を「第一の知己なり」と述べる親友である。

番号 一九

吉田松陰 送中村百合三序

中村百合三宛。嘉永五年（一八五二）カ。『吉田松陰全集』（大和書房版）には、「中村百合三を送る序」として、第六卷詩文拾遺に収める。中村は長州藩儒中村牛莊の長男で、吉田松陰とともに江戸へ遊學し、のち藩校明倫館の教授となった。この文は、百合三の関東遊學を祝う内容のもの。

番号 二〇

吉田松陰 擬對策評

土屋蕭海の建白書「擬對策」に、吉田松陰が評を加えたもの。土屋（文政二年生）長州藩陪臣。吉田松陰と親密で、文章を良くし、松陰の幽室文稿に、多くの評がある。これもその一つである。「擬對策」は、嘉永六年（一八五三）の稿で、對外防備の對策を論じたもの。松陰が所々に朱で評を入れ、卷末に總評を記す。

蕭海此策、作於癸丑之冬、先是墨虜之去、約明春重來、是時天下和戰之議紛然而起、有志之士、所深擔憂也、而策中無一言及于此者、以 藩議一定、無所復憂耳、但已主戰、而不論兵勢兵權、可破敵制勝者、而鼓舞將士之氣則為一大闕事矣、然其詞切而不激、婉而不弛、懇々有情、嫻々有態、使讀者不覺伏聽、則豈易及哉
乙卯四月廿三日夜三鼓閱了 松陰漫批

番号 二一

吉田松陰 上書草稿

安政六年（一八五九）二月四日、獄中で書いたもの。人材を登用して庶政の革新が必要であると主張。品川彌二郎に託し、藩の目安箱に投ぜしめたものという。

近日世間類ニ流傳仕候ハ、群小朋黨比周仕、而政府ノ正論ヲ一変シ御上尊攘ノ思召度々ノ御直書ヲ反古ニ致スヘキ工ミノ由、誠以惡ムヘキノ至ニ奉存候。依之憤懣ノ餘、時事一々申上候。

一 昨年御帰城當分御上御勤政、大臣小吏各其職ヲ励ミ君徳ヲ宣布シ言路ヲ洞開セシ故、御政道日ニ盛ニ候処、未タ一年ナラズシテ大ニ衰參シテ今日ノ光景ニ相成タルハ、誠ニ悲泣ノ至ニ候。昨年ナラハ微臣ノ言モ而相ノ手ヲ經速ニ上達セシニ、今ハ九天路絶テ已ム事ヲ得ス、此書ヲ目安箱ニ投スルニ至ル。心中御燐察奉祈候。・・・以下略

番号 二二

吉田松陰 史論草稿

織田信長、豊臣秀吉等を論じた史論草稿。

番号 二三

吉田松陰 孫子正文

中国の兵書「孫子」の評註。「孫子」は兵学者松陰が、最も得意としたもの。

番号 二四

吉田松陰 李氏焚書抄

明末の儒者李卓吾の「李氏焚書」を抄録したもの。李氏の著作は松陰の愛読書。

番号 二五

吉田松陰 愚論

安政五年（一八五八）五月の作。幕府の条約勅許奏請にたいする、天皇の不許可の勅答に接し、対外問題に対して、当事者の取るべき方策と、天下人心の一致の必要を述べたもの。京都の梁川星巖に送り、星巖が公卿を通じて天皇に呈したという。

番号 二六

高島秋帆 富士圖

高島秋帆 寛政一〇年（一七九八）〜慶応二年（一八六七）長崎の町年寄り、西洋砲術家。嘉永三年（一八五〇）松陰が長崎遊歴の際、秋帆の子で西洋砲術家の浅五郎を、しばしば訪問した。この図は安政五年（一八五八）の作で、自賛を加え、知友の大垣藩士小原鐵心に贈ったもの。

白日書大千古雪

余不解畫法、醉後頓生興致、寫曩昔所觀雲煙變態了

戊午至日後三日

華甲壽人高橋帆

大槻磐溪はまたこの図を見て、安政六年（一八五九）正月次の賛を加えた。

逆境之觀岳與順境之觀嶽、明暗快悶固不相同、而岳之為嶽則依然也、是故秋帆先生所畫昔日愁雲漠々之富岳、而今日觀之、乃為青天白日之富嶽矣、嗚呼誰知先生之心事者、鐵心子句云、人歷多難節乃高、然則先生今日之節、謂之與彼嶽爭高可矣

己未春王月第六日

辱知生磐溪大槻崇題

磐溪はさらに、鐵心が作った次の詩を書くことによってこの図を完璧なものにした。

眞成此老可稱豪 醉墨淋漓何等毫

十載幽囚歌正氣 一朝公議拜殊褒

畫添深感痴愈妙 人歷多難節乃高

他日春風泛游約 咲看嶽色落輕舫

并錄鐵心子贈先生詩以為完璧

崇

番号 二七

藤本鐵石 書狀（忠兵衛宛）

藤本鐵石 文化一三年（一八一六）〜文久三年（一八六三）岡山藩の輕卒。脱藩して諸国を漫遊したあと、京の伏見で国学と兵学の私塾を開いた尊攘派。文久三年、大和天誅組の変の首謀者の一人。忠兵衛（姓不詳）に、小判と掛軸が「ほしい、ほしい」と無心したもの。

小判（絵）と掛軸（絵）がほしい、ほしい、ほしい、ほしい

けふハとあるふほしい事がある。

御目（絵） もじに御はなし申上候。

合掌（絵） たのむ、たのむ、たのむ、たのむ。

五月四日

桃山老鐵寒士（花押）

忠兵衛様

番号 二八

梅田雲濱 和歌

梅田雲濱 文化二年(一八一五)→安政六年(一八五九) 小浜藩士。定明は諱。將軍繼嗣問題では一橋派となって運動し、井伊大老の排斥を主張、水戸藩への戊午の密勅(安政五年)の降下にかかわった、安政の大獄の最初の逮捕者。松陰とはかなりの交遊があるが、特別に親しい間柄となることはなかった。

さくら咲花のうき世をしたに見て

心高くもなくひはりかな

定明

番号 二九

佐久間象山 書状 (山寺懼堂、三村樂真宛)

山寺常山・三村晴山宛。安政一年(一八五四)四月二七日。佐久間象山のこの書状は、吉田松陰の下田渡海事件に連座して、江戸伝馬町の獄に入れられている時のもの。松陰は象山のすすめにより、海外視察を志し、安政一年(一八五四)三月二八日、下田で米艦に乗りうとして失敗した。象山はこの手紙で、松陰は「・・・當年廿五歳の少年には候へども漢書をも達者に讀下し、膽力も有之海防の事にハ頗る思をなやまし忠貞義烈之士」である、と述べている。

番号 三〇

會澤恒藏 書状 (川瀬七郎右衛門宛)

會澤安。通称恒藏、号は正志斎。水戸藩士。天明二年(一七八二)→文久三年(一八六三)後期水戸学の代表的人物で、その主著「新論」は尊攘派志士に強く支持された。吉田松陰は、嘉永四年(一八五一)に水戸に遊学し、會澤を数回訪問し、おおいに啓発された。宛て先の川瀬七郎右衛門は水戸藩の郡奉行。

番号 三一

藤田東湖 書状 (川瀬七郎右衛門宛)

藤田東湖 文化三年(一八〇六)→安政二年(一八五五) 水戸藩士。通称虎之助、諱は彪。徳川斉昭の側近で藩政改革を主導す。水戸学に基づく尊皇論で、尊攘派志士の理論的指導者の位置にあった。この手紙は、川瀬七郎右衛門宛て、天保一年(一八三〇)十二月四日付。

番号 三二

來島又兵衛 書状 (喜多村藤馬宛)

來島又兵衛 文化二年(一八一六)→元治一年(一八六四) 長州藩士。諱は政

久。禁門の変で戦死。この手紙は、江戸から郷里の親戚喜多村藤馬に宛た、安政一年(一八五四)二月二七日のもの。ペリーの再航を報告したもの。

番号 三三

船越清藏 七絶

船越清藏 文化二年(一八〇五)→文久二年(一八六二) 長門清末藩士。廣瀬淡窓門の陽明学者。京都に開塾。久坂玄瑞が吉田松陰に紹介、松陰の推薦により、萩明倫館の教官となった。

不似風魚日夜滋 桃花萬樹照霜髭

先生何意徐收卷 私語豐公是男兒

題伏水桃花圖

守愚

番号 三四

久坂玄瑞 天王山軍中日記

久坂玄瑞 これは元治一年(一八六四)七月一九日の禁門の変前後を記した、久坂の「義挙日記」の一部分である。久坂らは六月二四日、淀川から山崎の天王山麓に上陸し、長州藩諸隊の部署を定め、二七日陣地を築いた。久坂は禁門の変で負傷し、鷹司邸において自刃した。

六月十六日、富海より全軍乗船。

廿一日、大坂ニ着す。

廿二日、福原太夫着船。

廿三日、來島政久先鋒、福原太夫引軍東上△夜九半時。真木保臣・久坂通武全軍乗船。是時道傍觀者、蟻集雜遝、皆々長州様我々共之為、御苦勞なされ候と申す。米塩の直價なども遽ニ減し候よし 石山城の下を過れば、夜已明△軍令并ニ此度之歎願書を、諸隊ニ觀せしむ○六翁の我等之為盡力一形ならず。

廿四日淀太夫松尾佐一郎(ここまでは英傑遺墨一尊エ五貫に収む)

廿七日○城山の陣屋を築く○児玉小六來報、今曉七時京邸壯士不殘天龍寺ニ遷る。來翁鎮靜として伏水より進發すと報す。乃遊撃軍中、力士隊を歸し、且人夫數十人を遣し、其小荷駄の運送を助く○甲斐翁圓明寺槇谷浄土谷等を巡、窮民の疾苦を問ふ士民感激○寺忠・唯人等石清水參詣、二夜三日の御祈禱相願候。渡邊新三郎・岸十之允・澄川敬三參籠。大坂六翁より書簡來、米塩其外運輸被致候。乃天王山ニ登す。義勇隊殘人数佐龜督して着す。是朝品川弥を大坂に遣し諸用を辨せしむ。

廿八日、寺忠・菊四郎等、石清代参。野唯人光明寺假請二行。義助從僕を遣し天龍寺に至る。佐々木男也、對藩之多田莊藏禹■某一同来る、云々の談。因藩松田正人も伏水まで参候よし、又是八直二天龍寺二参候よし、是時佐々木一同、武田二郎天龍寺二行。

真翁・田岡・宮田などハ、城山の北間道をきりたつ。山寺柳谷圓明寺浄土谷等の道なり。義助本陣以北の間道をきりたつ。是日城山の陣屋成就、集義隊遷守。来翁より報あり、昨夜無滞着陣との事なり。淀より使者来る、石田英吉・長谷川哲三郎會す。小田原出張之儀申来る。郡山陣より使者来る、長谷川會す。是日京都兩町奉行へ當山滞在之儀申遣す。

番号 三五

久坂玄瑞 書狀 (前原一誠(佐世八十), 入江九一宛)

佐世八十(前原一世)・入江子遠(入江九一)宛。万延一年(一八六〇)五月一九日付。久坂玄瑞はこの年英学修業を命ぜられ、五月九日江戸に着いた。桜田門外の変後の水戸藩や彦根藩その他諸藩の情勢と、横浜は夷人の巢窟となり、物価が騰貴し人民が困窮している旨を報じたもの。佐世、入江ともに吉田松陰門下生。

再曰、船越翁送予至宮市、老人愛予太切、此度書ナシ、東行後好便もアレハ、諸藩報スヘしと約シ置候得は、御送可然ハ御送可被下候。・・・以下略

番号 三六

時山直八 書狀 (某宛)

時山直八 天保九年(一八三八)〜明治一年(一八六八)長州藩士。安政五年(一八五八)松下村塾に入り、吉田松陰に「中々の奇男子なり、愛すべし」といわれた。奇兵隊に入り参謀となる。戊辰戦争(一八六八)で北越に転戦して、長岡で戦死した。この手紙は、四国連合艦隊の下関砲撃(元治一年八月)の際、軍監として応戦した事にたいする藩庁からの恩賞を、辞退する旨を述べた内容のもの。慶応一年(一八六五)閏五月付、藩庁宛のものか。

番号 三七

入江九一 書狀 (杉山松助(介)宛)

入江九一(市) 天保八年(一八三七)〜元治一年(一八六四)長州藩足輕出身。安政五年(一八五八)十一月松下村塾に入門、吉田松陰に師事した期間は短かったが、高杉晋作、久坂玄瑞、吉田稔麿とともに松下村塾の四天王ともいわれる。名は弘毅、字は子猿、通称を杉藏ともいう。文久二年(一八六二)八月十四日付、同門

で池田屋事件(元治一年)で斃た杉山松介宛の手紙。高杉晋作が上海から帰国、近日上京する旨を伝えたもの。

番号 三八

高杉晋作 扇面

高杉晋作 扇面 この扇面は高杉の知友である、土佐勤皇党の田中光顕に与えたもの。来島又兵衛らの暴発(禁門の変)を阻止しようと、脱藩して上京した罪を問われ、高杉晋作は元治一年(一八六四)三月、野山に投獄された。高杉の「獄中手記」によれば、この詩は四月一〇日の作であることがわかる。東行は高杉晋作の号。

高杉晋作 目筆漢詩

孤身在縲紲 胸間百憂集 只知有今朝 不知有明日
曉鴉叫屋上 旭日透獄窓 拜之空涕淚 聞之又斷腸
斷腸非恨冤 涕淚非惜命 外患迫吾君 如何此邦政
為光顯田中君 錄舊製 東行生

番号 三九

高杉晋作 七絶

品川彌二郎の箱書によれば、この詩は、高杉晋作が三田尻の船問屋口米屋嘉七の宅で、角行灯に書いたものという。高杉の面目躍如たる酔余の戯筆。

酌酒高楼夜氣清 醉闌興足既三更
美人遠在海東上 一曲絃聲促舊情

東洋一狂生東行醉筆

番号 四〇

野村望東女 和歌

野村望東(もと、望東尼) 文化三年(一八〇六)〜慶応三年(一八六七)福岡藩士野村新三郎の妻で、安政五年剃髪して望東尼と号した。大隈言道門下の歌人。元治一年十一月、長州藩俗論派に追われた高杉晋作は、福岡藩勤王志士月形洗藏の周旋により、望東尼の平尾山荘に難を避けたあと、一二月長府に帰り功山寺で挙兵した。

よの中のみちかけさへもいちしるく
かなしき月になくほととぎす

望 東

番号 四一

松浦八郎 和歌

松浦八郎 天保七年（一八三六）〜元治一年（一八六四）久留米藩士。脱藩して長州藩尊攘派と行を共にし、禁門の変で真木和泉の隊に加わり、天王山で自刃。寛敏（ひろとし）は己諱。

番号 四二

真木和泉 和歌

真木和泉 文化一〇年（一八一三）〜元治一年（一八六四）久留米水天宮の祠官で尊攘派の巨頭といわれる。文久三年前半期の京都政局の尊攘派時代のリーダーであったが、政変で七卿とともに長州に落ち、翌元治一年の禁門の変の際、諸隊総督となり、天王山で自刃。

番号 四三

忍向（月照） 和歌

忍向（月照） 文化一〇年（一八一三）〜安政五年（一八五八）京都清水寺住職。水戸藩への戊午の密勅降下にかかわり、幕府に追われ福岡に逃れ、野村望東尼に匿われた後、鹿児島に行き、安政五年十一月、西郷隆盛とともに鹿児島錦江湾に入水した。

番号 四四

木戸孝允筆 議定盟約

これは慶応三年（一八六七）六月二日に、薩摩藩と土佐藩の間で結ばれた、いわゆる「薩土盟約」を木戸孝允が筆録したものである。薩長両藩による討幕路線にたいする、土佐藩の大政奉還路線とされるもので、薩摩藩は、いわば二段階での倒幕を考えていたものといえよう。

番号 四五

大久保利通 薩長藝三藩盟約

大久保利通 天保一年（一八三〇）〜明治二年（一八七八）鹿児島藩士。西郷隆盛、木戸孝允とともに維新の三傑といわれる。初代の内務卿となり実質的に日本の最初の首相であった。これは薩（鹿児島）、長（山口）、藝（広島）三藩が武力倒幕に向けて盟約を結んだ際の、大久保利通自筆の盟約草稿である。慶応三年（一八六七）九月八日、京都で大久保利通、西郷隆盛、品川彌二郎、廣沢真臣（長）と

辻将曹（藝）が会して決盟された。

一、三藩軍兵大坂着船之一左右次第、朝廷向斷然之御尽力、兼而奉願置候事。

一、不容易御大事之時節ニ付為、朝廷掘国家必死尽力可仕事。

一、三藩決議確定之上ハ如何之異論被聞食候共、御疑或被下間鋪事

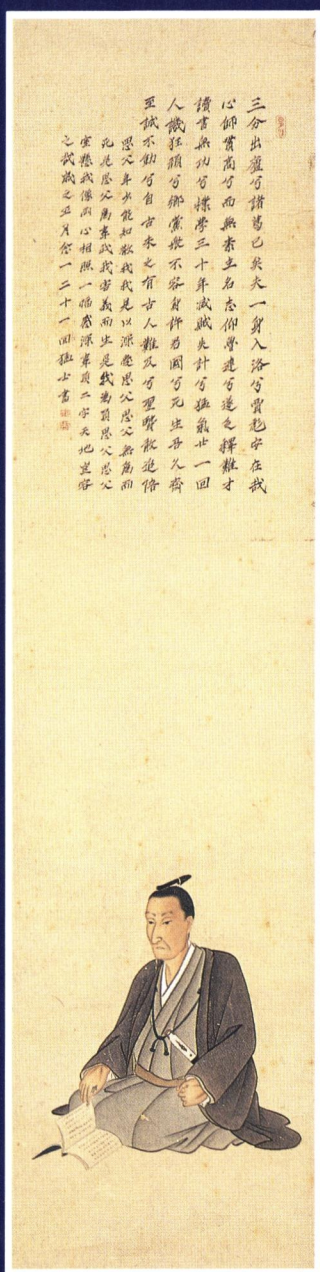
九月八日

三藩
連名

番号 四六

松下邨塾一燈錢申合帳

「一燈錢申合帳」は吉田松陰の没後、門下生が写本を作り、その筆稿料を蓄積し、他日のために備えようとしたもので、趣意書と、門下生それぞれの実績を記したもの。大部分が久坂玄瑞の筆になる。表紙に安政と書いたのを訂正し、文久辛酉十二月朔日と記しているように、文久一年（一八六三）一二月のもの。



講演会

演題：「公武合体」と尊皇攘夷運動

講師：佐々木克教授（京都大学人文科学研究所）

会期：平成6年10月14日(金)
15時～16時30分

会場：附属図書館AVホール(3階)

〈表表紙〉京都大学附属図書館所蔵「吉田松陰」木像スケッチ

〈裏表紙〉京都大学附属図書館所蔵「吉田松陰画像」松浦松洞画、吉田松陰賛